

『ティードレクス・サガ』における

英雄ジグルトの物語

石川栄作・野内清香

Die Geschichte von Sigurd in der Thidrekssaga

Eisaku ISHIKAWA und Sayaka NOUCHI

Abstract

Die Nibelungensage entstand nach A.Heuslers Untersuchung in der Form von zwei Liedern im 5. und 6. Jahrhundert in Rheinfranken. Sie wurde danach nicht nur in das österreichische Donauland, sondern auch nach Norden überliefert. Man teilt die nordischen Überlieferungen zeitlich in zwei Gruppen: Die erste Überlieferung seit Anfang des. 9. Jahrhunderts durch die Wikinger und die zweite seit Ende des 12. Jahrhunderts durch niedersächsische Hanseaten. Das Hauptwerk der ersten ist die Völsungasaga und das der zweiten die Thidrekssaga. In der vorliegenden Arbeit behandeln wir die Geschichte von Sigurd in der Thidrekssaga. Wir werden zuerst Sigurds Geschichte ins Japanische übersetzen und dann die Charakteristik der Sigurdgestalt im Vergleich mit der Völsungasaga klarmachen.

Aus der hier übersetzten Geschichte ergibt sich, dass Sigurds Lebenslauf in der Thidrekssaga ganz anders ist als der in der Völsungasaga. Die Charakteristik der Sigurdgestalt in der zweiten Überlieferung wird wie folgt zusammengefasst.

Sigurd, wie dessen Vater Sigmund, stammt hier nicht mehr von dem

Gott Odin ab. Er wurde nämlich als Kind von einer Hindin gefunden und gesäugt, und danach im Wald vom Schmied Mime gepflegt und blieb zwölf Jahre bei ihm. Er war aber so unbändig, dass er Mimes Schmiedeknechte schlug. Er taugte nicht zum Handwerk. Da schickte Mime den groben Knaben zu seinem Bruder Regin, der sich in einen Drachen verwandelt hatte, um ihn loszuwerden. Sigurd erschlug aber den Drachen mit einem Baumstamm und tötete später Mime. Solche eigentümlichen Episoden unterscheiden die Thidrekssaga klar und deutlich von der Völsungasaga.

Dasselbe gilt auch für Brünhild, die Sigurd darauf traf. Sie war nämlich auch keine Walküre, die von Odin für Ungehorsam bestraft worden war und in Flammen geschlafen hatte. Sie tritt hier als Herrscherin in der Stadt Seegard auf. Sigurd kam zu Brünhilds Burg, weil er von Mime gehört hatte, dass Brünhild einen Hengst namens Grane in ihrem Gestüt besessen hatte. Von seiner Verlobung mit Brünhild ist nicht hier die Rede. Sigurd erfuhr in diesem Werk einfach von ihr die Namen seiner Eltern und erhielt die Waffen.

Es ist also Sigurd, der vorschlug, dass König Gunnar die überragende Frau Brünhild heiraten sollte, nachdem er nach Niflungenland gezogen war und Grimhild, König Gunnars und Högnis Schwester, geheiratet hatte. So begleitete ihn Sigurd zu Brünhild. Dabei setzt aber die Szene des Empfangs die Tatsache voraus, dass sich Sigurd vorher schon mit Brünhild verlobt hatte. Es ist unverkennbar ein Widerspruch. Der Redakteur mochte es vielleicht auslassen. Sigurd entschuldigte sich immerhin mit der Begründung, er hatte Grimhild nur geheiratet, weil Brünhild keinen Bruder gehabt hatte. So spielt hier der Eid der Brüder eine wichtige Rolle. Gunnar offenbarte dem Schwager gerade wegen dieser Brüderschaft die Wahrheit der Brautnacht, um Hilfe zu erhalten. Sigurd tauschte nun mit Gunnar die Kleider und nahm mit dessen Einverständnis Brünhild das Magdtum und damit ihre übermenschliche Kraft.

Sigurds Mord beruht also in der Thidrekssaga darauf, dass er den Treueschwur der Brüder gebrochen und seiner Frau Grimhild alles erzählt hatte. Alles wurde klar bei dem Zank der beiden Frauen, der sich nicht im

Rhein, sondern im Saal entwickelte. In der Völsungasaga tötete Gutthorm den schlafenden Sigurd im Bett, aber Högni führte hier im Wald die Mordtat aus, als sich Sigurd am Bach niederwarf und trank. Die Thidrekssaga steht nunmehr ganz näher dem Nibelungenlied. Die Schilderung in der Thidrekssaga stammt deutlich aus der niederdeutschen Überlieferung. Wir kommen nun zum Schluss, dass die Sigurdgestalt in der Thidrekssaga die jüngere niederdeutsche Überlieferung zeigt, während die der Völsungasaga die alten nordischen Elemente hat.

I. 『ティードレクス・サガ』の成立

ニーベルンゲン伝説は五、六世紀の民族移動時代にライン河畔フランケン¹⁾の領土を発祥地として歌謡の形式で生じたものと推定される¹⁾。その伝説はその後ドイツにおいてはいくつかの段階を経て、十二世紀半ばには東方のドーナウ地方へも伝承されて初めて叙事詩の形式でまとめられ、その読み物としての叙事詩が十三世紀初頭にはドイツ英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』の素材となったことは周知のとおりである。この『ニーベルンゲンの歌』の成立でもってドイツにおけるニーベルンゲン伝説はひとまず定着したと考えるよいであろう。

一方、ニーベルンゲン伝説は、東方のドーナウ地方ばかりではなく、北歐へも伝承されていったことは特に注目に値することである。ドイツにおいては『ニーベルンゲンの歌』成立以前の諸作品は現在遺されていないのに対して、北歐においてはニーベルンゲン伝説の作品が数多く遺されているからである。その北歐への伝承は時代によって大きく第一次伝承と第二次伝承の二つに分けられる²⁾。

まず第一次伝承は、ヴァイキング等によって口頭で遅くとも九世紀初めにはスカンディナヴィアへ伝承され、のちにはさらにアイスランドへも伝承されていたものである。九世紀初期から十三世紀前半に北歐へ伝承されたそれらの歌謡を、十三世紀後半に書写して一つにまとめたものが『歌謡エツダ』である。この歌謡集はもともと二十九篇の古詩を含んでいたが、その後もこの種の古詩

1) Vgl. Andreas Heusler: Nibelungensage und Nibelungenlied. Wissenschaftliche Buchgesellschaft Darmstadt 1973. (Stammbaum des Nibelungenlieds) S.49.

2) 雪山俊夫: ニーベルンゲンの歌基礎の研究 大岡山書店 1934年 275-301頁参照。

が発見されて、現在では断片を混じえて三十七篇を数えるに至っている³⁾。それは内容からして大きく北欧神話と英雄伝説の二つに分けられ、後者にニーベルンゲン伝説関係の歌謡が十九篇遺されている⁴⁾。それらの中には、北欧で新たに生成発展し、ライン・フランケンからの伝承というよりはむしろ純北歐的な性質のものもあり、『ニーベルンゲンの歌』よりも古いゲルマン精神を示している。しかし、『歌謡エッダ』は成立年代と作者を異にした歌謡の集録であり、類似の歌謡が集められているだけで、ニーベルンゲン伝説に関する一連の歌謡についても、一つの明白な筋を生み出すようにはまとめられていない。シグルズの死を取り扱っている『シグルズの歌』(断片)では、欠落部分もあって、不明の部分も多い。

ところが、幸いにもこのような欠落部分を補ってくれるものが第一次伝承として現在の我々に遺されている。『ヴォルスンガ・サガ』⁵⁾がそれである。この作品は、『歌謡エッダ』で語られているニーベルンゲン伝説に関する諸歌謡を散文で一つにまとめたものであり、十三世紀初めから終わりの間、おそらくは1260年頃にアイスランドの物語詩人によってまとめられたものと推定される。それは『歌謡エッダ』の知らないシグルズの父シグムンドの物語を伝えているのみならず、『歌謡エッダ』の欠落部分を補ってもいるし、さらに『歌謡エッダ』の諸歌謡の相互の不十分な連絡をなだらかにして筋をまとめているので、ニーベルンゲン伝説の北歐第一次伝承についての概観を知ることができる点に大きな意義がある。

さらに北歐への第一次伝承に属するものとして『スノリのエッダ』⁶⁾を挙げることができる。スノリはアイスランド随一の歴史家・詩人であって、また有力な政治家でもあったが、1222-25年にアイスランドの若い詩人たちの

3) グスタフ・ネッケルおよびハンス・クーン編集のテキスト(Gustav Neckel/Hans Kuhn (Hrsg.): Edda. Die Lieder des Codex Regius nebst verwandten Denkmälern. 5. verbesserte Auflage. Carl Winter・Universitätsverlag Heidelberg 1983)は、現在この三十七篇のほかに『散文エッダ』と『ヴォルスンガ・サガ』からの引用詩をも含んで刊行されている。

4) この十九篇の歌謡については石川栄作:『ニーベルンゲンの歌』—構成と内容—郁文堂 1992年21-7頁を参照されたい。

5) Paul Herrmann(Übertragen): Isländische Heldenromane. Eugen Diederichs in Jena 1923. S.37-136. 菅原邦城訳:ゲルマン北歐の英雄伝説—ヴォルスンガ・サガ 東海大学出版会 1979年。

6) Gustav Neckel/Felix Niedner(Übertragen):Die jüngere Edda. (Thule 20.Band) Eugen Diederichs in Jena 1925. なお、詳細については石川栄作:スノリにおけるニーベルンゲン伝説 徳島大学総合科学部「言語文化研究」第7巻2000年を参照されたい。

ために詩学書を書いた。この書物は第一部「ギルヴィのまどわし」、第二部「詩人の語法」および第三部「韻律一覧」の三部から成り、特に第二部においてスノリはそれまでの著名なスカルド詩人の388篇の詩を断片ながら随所に引用している。その中でも第39章から第41章にかけてはニーベルンゲン伝説に関する詩を引用しながら、「カワウソの償い」、「ファフニールの黄金」および「ニーベルンゲン族」について叙述している。それらは上記の『歌謡エツダ』や『ヴォルスンガ・サガ』で語られている内容とほとんど同じである。共通のニーベルンゲン伝説を伝える歌謡が当時スノリの周辺にも数多く存在していたことを窺わせて、貴重な資料であると言えよう。

このほかにも『ノルナゲスト物語』⁷⁾や『ロートブロック物語』⁸⁾も挙げられるが、これらはいずれも上記の諸作品と同じように古い伝説相を示しており、ニーベルンゲン伝説の原型を知るためには必要不可欠な貴重な資料である。

北欧への第二次伝承は、その後ドイツで新たな展開を見た歌謡や説話が、十二世紀後半以降にハンザ商人たちを介してノルウェーへと伝えられたものである。何よりもまず完全な伝説相を伝えている『ティードレクス・サガ』⁹⁾が挙げられる。このほかにフェロー諸島のニーベルンゲン伝説に関する三つの舞踏譚詩¹⁰⁾やデンマークの譚詩『クレモルトの復讐』¹¹⁾なども挙げられよう。これらは第一次伝承の諸作品に較べると、比較的新しい伝説相を伝えており、ニーベルンゲン伝説の変遷を理解するためには有益な資料である。

本稿はまさにこの第二次伝承の中でも最も貴重な作品である『ティードレクス・サガ』を取り扱おうとするものである。東ゴートのディートリヒ大王は北欧ではティードレクと呼ばれ、ジークフリートとともに古代ゲルマン時代の英雄として最も人々に愛された伝説的人物である。この人物に関するドイツの歌謡や説話がヴェストファーレンの町ゾーストを經由して、ニーダーザクセンの

7) Die Erzählung von Nornagest. In: Paul Herrmann(Übertragen): a.a.O.,S.197-218.

8) Die Geschichte von Ragnar Lodbrock. In: Paul Herrmann(Übertragen): a.a.O.,S.137-95.

9) Fine Erichsen: Die Geschichte Thidreks von Bern . (Thule 22.Band) Eugen Diederichs Jena 1924.

10) 『レギンの歌』、『ブリュンヒルド譚詩』および『ホグニの譚詩』の三篇。Vg.Helmut de Boor: Die Färöischen Lieder des Nibelungenzyklus. Carl Winters・Universitätsbuchhandlung Heidelberg 1918.

11) Vgl.Otto Holzapfel: Die dänischen Nibelungenballaden. Texte und Kommentare. Verlag Alfred Kümmerle Göppingen 1974.S.111-66. この研究書の中にテキストと現代ドイツ語訳並びに注釈が掲載されている。

ハンザ商人たちを介してノルウェーに伝えられると、その地の物語詩人たちはこの英雄に興味を抱き、彼に関する説話を書写したりした。その後、北欧の一物語詩人——それはアイスランド人であったと言われている——の手によって、それらの説話が1250年頃集録されて、『ティードレクス・サガ』と命名された。この編纂は南方文化に関心を有するノルウェーの老ハーコン王（1217-63）の命令によるものと伝えられ、その後さらに二人の物語詩人によってベルゲンにおいて編集されたのである。

この説話集はもちろんティードレクを中心とするものであるが、ニーベルンゲン伝説をも内容的にはほぼ全体にわたって集録している。それは低地ドイツからの伝承であり、その後の比較的新しいニーベルンゲン伝説を伝えている。この『ティードレクス・サガ』は第一次伝承の『ヴォルスンガ・サガ』と比較すると、わが国においてもまたドイツにおいてもそれほど詳しくは知られていない。わが国においてはこれまで物語内容は簡単に紹介されていたものの、その作品におけるニーベルンゲン伝説の全貌が紹介されたのは、1999-2002年の山崎陽子氏による北欧語からの翻訳¹²⁾によって初めてである。また現在の我々に唯一伝えられているフィーネ・エリヒセンの現代ドイツ語訳（1924年、復刻1967年）にしても、最近では入手しがたいものとなっている。

そこで、本稿ではこのフィーネ・エリヒセンの現代ドイツ語訳を底本に用いて、『ティードレクス・サガ』におけるニーベルンゲン伝説、特にジグルト（一般的にはジークフリートと表記）に関する部分として、「若きジグルト」（210-22頁）、「二組の結婚」（266-9頁）および「ジグルトの暗殺」（371-7頁）の三つの部分をまずは日本語に訳出して紹介し、そのあとでとりわけ『ヴォルスンガ・サガ』との比較において『ティードレクス・サガ』の特質を探り出すことにしたい。現代ドイツ語訳に基づくものとはいえ、それをここで邦訳して北欧への第二次伝承としての『ティードレクス・サガ』におけるジグルト像の特質を探り出すのも意義深いことと確信する。

なお、訳出にあたっては、原典の北欧語からの貴重な翻訳である山崎陽子氏の上記日本語訳を常に参照させていただき、脚注についてもそれを大いに活用させていただいた。ちなみに、登場人物や地名等のカタカナ表記については、フィーネ・エリヒセンの現代ドイツ語訳に基づいて、ドイツ語読みに従ってい

12) 山崎陽子: 翻訳『シズレクス・サガ』におけるニーベルンゲン伝説Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ, Ⅳ 目白大学人文学部紀要「言語文化篇」第5-8号1999-2002年。

ることを付記しておく。

II. 『ティードレクス・サガ』における若きジグルトの冒険

1. ジグムント王、ヒスパニアのジジベに求婚する

かつてジグムントという名の王がいた。この王はタルルンゲン国¹³⁾を治めていた。その父はジフィアン王といい、強力な男であり、権力ある支配者だった。父の遺産を受け継ぐと、ジグムントは西方ヒスパニアのニードゥング王とその息子オルトヴァンギスに使者を送り、娘ジジベを嫁に出来ないかと尋ねた。彼女は驚くほど美しい娘で、あらゆる点において気品があると、彼は聞き及んでいたのである。ニードゥング王とその息子はジグムント王の使者を快く迎え入れ、敬意を示して、黄金やその国でもきわめて稀少な高価な品々を贈り物として十分に与えた。しかし彼らの伝言に対して王は、娘をいかなる場合にも見知らぬ土地に送り出すつもりはないとの意見を述べた。「娘にも我々にも馴染みのない男たちと一緒に行くというのなら尚更のこと。もちろんあなた方の王については、たいへんな勇者であるとの評判が高い。もし王ご自身が我が娘に求婚するために出向いて来るなら、私も拒みはしないだろう。」さらに王とその息子はジグムント王に高価な贈り物を言付けた。このような返事をもって使者たちは帰郷した。国元で彼らはジグムント王に託されたすべての言伝を伝え、ニードゥング王が自分たちを豪華にもてなしてくれたさまをも語った。

2. ジグムント王の求婚の旅

まもなくジグムント王は旅の支度を整え、求婚のためにスペインへ旅立とうとした。輝くばかりの衣装に身を包んだ四百名の騎士を彼は連れて行き、きわめて豪華で贅沢を尽くした旅を続け、西方ヒスパニアのニードゥング王の国に至るまでは、休息を取らなかった。ニードゥング王は彼の旅のことを耳にすると、彼のために市と晴れやかな歓迎の席を設けさせ、そこへ自らも出かけて、ついに彼ら自らが互いに顔を合わせたのであった。それからニードゥング王は敬意を示してジグムント王を迎え入れ、華やかで名誉にあふれた輝かしい祝宴を催した。そこでジグムントは、すでに事前に伝えていたように、ニードゥン

13) カルルンゲン国(Carlungen)の書き間違いだと推定される。Vgl. Paul Piper: Die Nibelungen. Erster Teil. In: Joseph Kürschners Deutsche National-Litteratur. 6. Band 2. Abteilung. S. 116.

グ王の娘に求婚したいという願いを述べた。ニードゥング王は答えた。「私がすでに使者たちに伝えていたことに変わりはありません。あなたご自身がお越し下さったからには、この結婚を阻むものは何もありません。」彼らの対談が終わる前に、ニードゥング王は娘をジグムント王と婚約させた。

3. ジグムント王の結婚

そこで結婚式が多大な費用をかけて支度され、ニードゥング王は娘と婿に大きな町々、堅固な城塞および国土のほぼ半分を与え、残りのものは息子オルトヴァンギスに譲り渡した。さらに彼は息子に王位を授けた。というのも、彼は高齢だったからである。この大祝宴はこのうえなく豪華で盛大に行われた。高価な食卓用品の準備にしても、広間の飾り付けにしても華やかで、ヒスパニア中のたいそう高貴な王侯たちも集まって来て、歌や演技のありとあらゆる娯楽も繰り広げられ、さらにたっぷりと金の贈り物もなされたのであった。大勢の人々がそこに寄り集まったが、このような豪華絢爛の祝宴が繰り広げられたことはヒスパニア中でこれまでなかったほどであった。祝宴は五日間続いた後、ジグムント王は妻ジジベと騎士たちを伴って旅立った。彼の国に到着するまでの道中、彼は大きな榮譽に包まれて進んで行った。

4. ドラーゾルフ王の使者

七日後、ドラーゾルフ王の使者二人が現れ、彼の前に進み出て、封印のついた書状を見せて、彼らの用件を申し述べた。彼らは言った。「ドラーゾルフ王とあなたの妹様があなたによろしくとのこと。そしてあなたにお伝えするよう仰せつかりましたのは、王は全軍の準備を整え、すべての公爵や伯爵とともに東方のポーレン国¹⁴⁾へと遠征を行うつもりだということです。王はあなたにこうして使者と書状を送って、調達できうる限り多くのすべての家臣を率いてあなたに助勢してほしいとのこと。」ジグムント王は答えた。「私の妹と義弟が私の助力を必要としているならば、彼らに援軍と支援をしてあげることは私にふさわしいことだろう。お引き受けしよう。」その日のうちに彼らは国中の有力者たちに封印のついた書状を送り、彼に力を貸そうという者、楯を携え、馬にまたがり、戦おうと思う者は皆、四夜のうちに彼のもとへ来るようにと命

14) ポーランドを指す。

じた。また十二ヶ月間遠方に留まることになるかもしれないので、そのような心づもりでいてもらいたいとも通達した。このように軍勢が集結すると、ジグムントはそれを率いて大急ぎで国から義弟のもとへと出発した。

5. ジグムント王、国政を委ねて遠征に出かける

ジグムント王は国を出発する前に、彼の二人の顧問官ハルトヴィーンとヘルマンを呼んだ。彼らはシュヴァーベン伯爵で、有力な領主であり、立派な男たちで、かつ優れた勇士たちだった。この兩名を任命して、王は妻と国とすべての財産を守らせることにした。というのも、王は彼らを心から信用していたからである。しかし、他人を心から信じている人がその相手から欺かれるということは、よくあることである。

両人は王とともに馬に乗って出かけた。王は自分の不在中に彼らがどのように対処すべきかについて、彼らといろいろ話し合った。なかでも特に王が彼らに頼んだのは、常に彼の妻ジジベには従順に仕えてくれるようにということだった。彼らもまたそれを約束した。それから彼らは引き返し、王は旅立って行った。

ジグムントが彼の義弟と合流すると、義弟は三千人の騎士を率いていた。軍全体は七千名を数えたが、ジグムント王がこの集合に際して連れていた兵の数はドラールゾルフ王に引けを取らなかった。この全軍を率いて彼らは出発し、ポーレンに進軍し、数々の英雄的行為を成し遂げたのである。

6. ハルトヴィーンの裏切り

伯爵たちが国政の代理人となってからしばらくして、ハルトヴィーンはある日、王妃ジジベの前に歩み出て、彼女にこう話しかけた。「この国とすべての財宝、そしてあなたの安全は私の保護下にあります。私があなたに目論んでいることをお話ししましょう。私はあなたを自分の愛人とし、妻とするつもりです。さらに私は、今や私が引き継いだこの国を私たち二人のものにしようと考えています。ジグムント王がこのたびの遠征から帰って来るかどうかは、定かではありません。しかしたとえ彼が帰還したとしても、彼はそれを私、否、あなたが私と同じようにするつもりならば、私たちから取り戻すことはできません。私はジグムント王より劣っている騎士ではなく、むしろもっと優れているのです。」ジジベは答えた。「私にそのような無理なことを要求しないで下さい。私

は主人、ジグムント王を待つつもりですし、王がお帰りになる前に他の夫を迎えはしません。今回はあなたの言葉は私の胸にしまっておきましょう。けれどもあなたがそのようなことを私にさらに何度も申すようなら、王がお戻りになった時に、私はあなたの目論見を何もかも主人に打ち明けることにします。そうすればあなたはただちに吊し首ですよ。」彼は答えた。「王妃よ、そのように仰しゃるべきではございません。私が私の国で握っている権勢が、この国のジグムント王の権勢より少なくはないということを、あなたはよくご存じのはずですから。」彼女は答えた。「たとえあなたが世界のほとんどを支配するほどに力があり、ジグムント王があなたの家臣に過ぎずとも、それでも私が夫にしたいのは彼であって、あなたではありません。厚かましくもそのことについてもうこれ以上口にするのはやめになさい。あなたがその命を永らえたいと思うなら。」そこでハルトヴィーンは立ち去り、その話し合いは終わった。

7. 騎士ヘルマン、友人を支援する

ハルトヴィーンはそこで事細かに彼の同僚に、彼と王妃の間に起こったことを語った。そして彼に助言を乞い、どうすれば自分は目標を達成できるかと尋ねた。ヘルマンは答えた。「親友よ、できる限り私は君にそのようなことをするのを思いとどまるよう忠告したい。しかし君がそれでもこのこと、あるいは何か別のことを行おうというのなら、できる限り、私は君に助言と援助をして味方しよう。」ハルトヴィーンは答えた。「確かに言えることだが、私の望みを確実に実現させることが私の願いなのだ。さもなければ私は死ぬつもりだ。」ヘルマンは答えた。「君がそのことをそれほど熱心に押し進めるのなら、我ら二人はもしかしたら我らの望みを達成できるかも知れない。」

しばらくしてヘルマンは王妃のところへ相談に行った。彼女は彼を快く迎え、彼はさまざまなことを彼女と話した。最後に、彼はハルトヴィーンが彼に託した用件を持ち出した。すると彼女は以前と同じように答え、そして今度はひどく腹を立てた。ヘルマンは退出し、彼の友に自分と王妃が話し合ったことを語った。時は過ぎ、ハルトヴィーンは王妃にたびたびしつこくこの願いをもって迫ったが、彼が切望したことは決して叶わなかった。

8. ジグムントの帰還

さて語られたところによると、ジグムント王と義弟ドラールゾルフは、遠く広

くポーレン国全土に行軍し、致命的打撃を与えたり、国土を荒廃させたり、略奪したりして、途中で行き会ったすべての者たちに多大な損害を与えた。また彼らはひんぱんにその地方の住人たちと小競り合いになったが、勝ったり負けたり戦いを続けた。彼らが引き返した時、彼らは多くの兵士たちを失っていたが、しかし、彼ら自身は無傷だった。

9. ハルトヴィーンとヘルマンの偽証

ジグムント王は自分の国の国境まで戻って来た。二人の国政代理人ハルトヴィーンとヘルマンはそのことを聞いて計画を練り上げた。ハルトヴィーンは友人に言った。「私が心配でならないのは、王が帰って来たら、王妃がジグムント王に我らの陰謀を何もかも話すのではないかということだ。いつも我々の申し出を拒絶していた時と同じように、王妃は怒りを示し、侮辱するように、すべてを話すことだろう。王が事の真相を知れば、彼は我々を重い違反行為のかどで訴えるだろう。だから我々はぐずぐずしないで決心しよう。首尾よくやり遂げるためには、そうする必要がある。」彼らは別れる前に、為されるべき事をきちんと決めた。彼らは王妃のところへ行き、これから王を迎えに出かけて、王の様子を見に行くつもりであることを彼女に知らせた。彼女はそれを了承し、彼らをできるだけ速やかに出発させた。彼らもまたそうした。彼らがジグムント王の前にやって来ると、王は彼らを快く迎えた。彼らは内密に話し合うことを要求し、三人きりになるとすぐに、ハルトヴィーンは言った。「国王様、私はあなたに悪い知らせをお伝えしなければなりません。しかし、それは本当のことなのです。どうか私の報告をお聞きになっても私を責めるのはお止し下さい。というのも、あなたが全財産を私と同僚の手に委ねて下さったからには、私はあなたに何も秘密にしておくことはできないのです。あなたが国をお発ちになるや否や、あなたの奥方は悪しき恥ずべき行為を始めました。彼女は顔立ちの美しいあなたの従僕と関係を結び、彼を自分の寝床に引き入れました。我々二人は彼女にそれを禁じようとしてしました。すると彼女は、あなたが戻って来たら、我々のことをあなたに言いつけるといって脅しました。そうすれば彼女の命令であなたは我々を打ち殺させるだろうと脅すのです。こうしてその従僕は毎夜彼女のそばで彼女の腕に抱かれて眠りました。そして今彼女は彼の子を身ごもっています。国王様、あなたがこのことを事前にお耳にすることなしに、あなたを御帰国させることは、我々にはとてもできなかったのです。」王は答えた。

「そのことにお前たちは確信を持っているのであろうな。もしお前たちが彼女のことで嘘をついているなら、お前たちには死んでもらうぞ。」ヘルマンは答えて、自分たちの言ったことは真実であると宣誓した。そこでジグムントは言った。「よき友らよ、私はこの恥知らずな振る舞いをした女をどうするべきだろうか？」ハルトヴィーンは答えた。「ご決断下さい、王よ。あなたのお望みになることを我々は実行いたします。」王は続けた。「彼女は吊るし首にされて当然だ。あるいは彼女の目を潰し、両足を切り落とし、そうして彼女の父親に送り返すこともできよう。」ハルトヴィーンは答えた。「他にも案がございます。彼女をシュヴァーベンの森に送るのです。そこには人の通る道はありません。十年間、そこに足を踏み入れた者は誰もおりません。そこで彼女の舌を切り取り、それから神の思し召しがある間は、生かしておくのです。」王はこの案がたいへん気に入った。

10. ジジベの死とジグルトの誕生

伯爵たちはその場を去り、馬を駆って戻った。ある日、王妃は張り出した城壁の上に立って、馬があげる土埃を目にした。それからすぐに彼女は乗り手たち自身を見て、その武装で、伯爵たちが家臣らとともに帰って来たことを確認した。彼らが声の聞こえる範囲に来ると、彼女は呼びかけた。「神よ、どうかジグムント王についてよい知らせが聞けますように。あなたたちは王についてどのようなことを私に伝えてくれるのですか？本当のことを聞かせて、嘘はつかないで下さい！」ハルトヴィーンは言った。「ジグムント王はお元気です。すべてうまくいきました。王は軍勢とともにシュヴァーベンの森においでです。王はあなたにそこまで会いに来るようにとのお言葉を送られました。そこで王はあなたにお会いになるおつもりで、王の命令により、あなたを彼のもとまでお連れするように言われております。」王妃は答えた。「王のところに行くとなれば、ぐずぐずしてはいられません。私とともに行ってくれる侍女は誰ですか？」ヘルマンが答えた。「なぜ侍女を連れて行く必要があるでしょう？あなたが行く道のりは遠くありませんから。」王妃は答えた。「では準備はできています。」それから彼らは、人間がまだ足を踏み入れたことのない森の谷間へと馬を進めて行った。そこで彼らは馬から降りた。すると王妃は大いに悲しみながら言った。

「どこにいらっしゃるのですか、ジグムント王よ？なぜあなたはこの男たちに託して私をここへ連れて来たのですか？今私ははっきり悟りました。私は裏切

られたのです。あなたは私だけでなく、あなたの子供までも欺いたのですよ。」そして彼女は激しく泣いた。伯爵ハルトヴィーンは言った。「これから我々は、王が我々に依頼なさったことを実行しましょう。つまりあなたの喉の中から舌を切り取り、それを王のもとに届けるのです。ここであなたには死んでもらいます。」しかしヘルマンは言った。「この女性に罪はない。我々は別の方法を取ろうではないか。ここまでついて来た犬の舌を切り取って、それを王のところへお持ちしよう。」ハルトヴィーンが反論した。「今や彼女は、たびたび我々の提案を拒否して侮辱してきたことの罰を受けるべきなのだ。我々の計画は実現されるべきだ。」ヘルマンは答えた。「神のお力添えで、私がそれを阻止して、お前が彼女に危害を加えないようにしてやろう。」そして彼は剣を抜いた。この瞬間、王妃は産気づいて、とても可愛い男の子を産み落とした。そこで彼女は持って来ていた蜂蜜酒用の道具一式からガラス容器を取り出し、赤子をおしめでくるみ、それをガラス容器に入れ、入念に蓋を閉めて、自分のそばに置いた。

二人の騎士は戦いを始め、雄々しく武器を交えた。ついにハルトヴィーンが倒れたが、そこには王妃が横になっていた。彼の足がガラス容器にぶつかったので、容器は川に転がり落ちた。その瞬間、ヘルマンが剣を振り、ハルトヴィーンの首に切りつけると、その頭は飛んだ。王妃は赤子の身に起こったことを目にすると、気を失い死んでしまった。

11. ジグムント、真相を知ってヘルマンを追放する

ヘルマンは王妃の亡骸を抱き上げ、できる限り丁重に埋葬して、馬に飛び乗り、来た道をすっかり引き返して、ジグムント王のところまでやって来た。王はヘルマンに尋ねた。「お前の友人ハルトヴィーンはどこだ？」ヘルマンは答えた。「彼が王妃を打ち殺すか、あるいはばらばらに切り刻もうとしたことで、我々は仲違いをしてしまいました。私は実行されようとしていることを目の当たりにして卑劣だと思い、彼女を助けようと思いました。そのために我々は口論となり、武器を手にする事になったのです。最後に私がハルトヴィーンを打ち倒しました。王妃はしかしそうしているうちに、驚くほど美しい男の子をご出産されました。その子をハルトヴィーンは、自分の命が尽きる前に殺してしまいました。」王は尋ねた。「お前たちが王妃について語ったこと¹⁵⁾は本当だった

15) 王妃が従僕と関係を結び、従僕の子供を身ごもっていると報告したことを指す。

のか、それとも嘘だったのか？」ヘルマンは答えた。「嘘ではございませんでした、国王様！」「なぜお前は私の命令を実行せずに、お前の誓いを破ったのだ？」と、王はさらに追及した。ヘルマンは答えた。「国王様、ある人物が大きな過ちを犯しても、それを後から悟って悔い改め、その後はずっと立派な人物になるということはあるものです。」激怒して王は叫んだ。「私の前から消え失せろ！もはやお前に仕えてもらおうとは思わぬ。お前は仕える主君にとって裏切り者となりかねない。」ヘルマンは馬に乗り、彼のすべての家来たちを伴って立ち去り、自分が難を逃れたことを喜んだ。一方、ジグムントは彼の国を治めたが、ジジベを悼く哀れんだ。

12. 雌鹿のもとでの若きジグルト

王妃のガラス容器は川を流れて海へと下って行った。まもなくそれは引き潮と同時に海岸へと流れ着いた。海は潮が引き、そのため容器はすっかり乾いた土地の上に残った。男の子はそうこうしている間にもかなり大きくなっていった。そして容器が岸にぶつかった時に、それは粉々になり、子供は泣いていた。そこへ一頭の雌鹿が跳ねて来て、その小さな男の子を口にくわえ、寝床へと運んだ。そこで雌鹿は二頭の仔を養っていた。雌鹿は男の子を寝かせると、自分自身の仔たちと同じようにその子供にも乳を与えて飲ませた。子供は十二ヶ月間雌鹿のもとにいた。その時には彼は他の四歳の子供たちほどに大きく力強くなっていた。

13. ミーメとその弟

ミーメ¹⁶⁾という名の男がいた。彼は鍛冶屋としての熟練した技のためにたいへん有名だった。彼は自分に仕える弟子をたくさん抱えていた。彼にはまた妻もいた。しかし、結婚してから九年というもの、子供は一人も生まれなかった。そのことを彼はひどく嘆いていた。彼にはレギンという名の弟がいた。弟は強かったが、性悪だったので、しっぺ返しを食らった。彼はたくさん魔法や妖術を使ったため竜になったのである。そのため彼は誰でも絞め殺そうとした。彼は十人の男たちが束になっても近寄れないほどの怪物だった。彼の兄ミーメのほかは誰も彼の住処(すみか)を知らなかった。

16) 古ノルト語ではミーミル(Mimir)と表示するという原注がついている。

14. ジグルト、ミーメの養子になる

ある日、ミーメは炭を焼くために森へ出かけて行った。三日間彼はそこに留まろうと思い、森の中で大きな火を起こした。彼が一人で炭焼き窯のそばに立っていると、一人の美しい男の子が飛び跳ねながら彼のところにやって来た。ミーメはその子供に何者かと尋ねたが、少年は答えられなかった。それにもかかわらずミーメはその子を引き寄せ、自分の膝の上へのせ、衣服でくるんでやった。というのは、その子供は裸だったからである。そこに一頭の雌鹿が駆け寄って来て、その子供の顔や頭を舐めた。そのことからミーメは、この雌鹿が男の子を育てたのだらうと思った。そのため彼は雌鹿を殺そうとはしなかった。彼は男の子を引き受け、その子の面倒を見て、家に連れて行き、その子を自分の子として育てようと考えた。彼はその子に名前をも与え、ジグルトと名づけた。男の子は彼のもとで成長し、十二歳になった。その時には彼はたいへん大きく強くなって、彼に匹敵する者は見つけられないほどだった。彼はとても扱いに負えず、ミーメの鍛冶場の弟子たちをぶちのめし、嫌な思いをさせたので、そのことで我慢できる者はほとんどいなかった。

15. 鍛冶屋としてのジグルト

エッキハルトという名の少年は、十二人の徒弟の中で一番腕がよかった。ある日のこと、ジグルトが鍛冶場にやって来ると、その時エッキハルトは仕事をしていた。そこで彼は火ばさみでジグルトの両耳を叩いた。するとジグルトが左手でグイと彼の髪を引っ張ったので、彼はたちまち地面に倒れてしまった。すぐに徒弟たち全員が駆け寄って来て、エッキハルトに味方しようとした。しかしジグルトは稲妻のようにすばやく戸口から逃げ去り、エッキハルトの髪を後ろに引っ張って、彼をミーメの前まで引きずって行った。ミーメは言った。

「お前はひどいことをするものだ。役立つことをしてくれるわしの徒弟たちを打ちのめすとは。お前はばかげたこと以外には何もしない。だがお前は今や十分に力をつけており、彼らと同じだけのことはできるだろう。わしはお前をもっと自ら進んで働くようにしてやろう。お前が嫌だというなら、わしはお前が鍛冶仕事をしたいと言うまで、お前を殴りつけるぞ。」そう言って彼はジグルトの手を取り、鍛冶場へ連れて行った。彼は自ら炉の前に座り、大きな鉄の棒を取り出し、それを火の中に入れた。それから彼はジグルトに最も重いハンマー

を与えた。赤々と熱せられた鉄を彼は炉から取り出し、金敷の上に置いて、ジグルトに叩くよう命じた。ジグルトの最初の一撃はたいへん力強いものだったので、金敷の石はひび割れ、金敷は地面の表面にまで食い込み、鉄は広い範囲に飛び散って、火ばさみとハンマーの柄は粉々に砕けてしまった。ミーメは叫んだ。「今までこれ以上恐ろしく、不器用に叩いた奴を見たことがない！お前がどうなろうとも、お前は鍛冶職人には決して向かないだろう。」そこでジグルトは部屋に走って行き、養母のそばに座って、それが彼にとっていいことなのか、あるいは悪いことと思われるのかについては、誰にも話さなかった。

16. ジグルトの竜との戦い

ミーメは計画を練った。というのも、彼は自分がこの子供のせいで大きな災難に見舞われるだろうと悟ったからである。そのため彼はその子を殺してしまおうと決心した。彼はあの大きな竜が棲んでいる森へ行き、竜に小僧をくれてやるから、その子を殺して欲しいと語った。それから彼は家に戻った。翌日、彼は養子ジグルトに、炭を焼くために森に行ってくれないかと尋ねた。ジグルトは答えた。「今後も、これまでと同じように僕によくしてくれるなら、僕は行って、あなたの望む仕事は何でもやりましょう。」そこでミーメは彼に出かける準備を整えてやり、滞在することになる九日間分のワインと食糧、それに斧を与えた。それから彼は出かけて行き、森がよく見える場所に来ると、ジグルトに森の方を指さして教えた。

ジグルトは森の中に入って行き、手はずを整えると、歩き回って、大きな木々を切り倒した。それから彼は大きな火を起こした。さらに彼は苦勞してちょうど切り倒したばかりの大きな木の幹を引きずって来た。朝食の時間になったので、彼は食事のために腰を下ろし、その際に食糧をすべて食い尽くし、また一滴のワインも残さなかった。ミーメはそれで九日間もつだろうと思っていたのだが。そのあと彼は独り言を言った。「もし誰かが僕の前に現れ出て、邪魔をしようとするなら、その者と今闘ってみたいものだ！一人の人間を打ち殺すことくらい、今は自分の手に負えないことではないように思える。」彼がほとんどそう言い終わらないうちに、巨大な竜が彼の方に近寄って来た。そこでジグルトは言った。「今すぐに自分の実力を試すことができるかもしれないぞ。願ったり叶ったりだ。」そう言って彼は火のそばに跳び、その中で赤々と燃えていた最も大きい木の幹を取り上げると、竜に駆け寄って、その頭を打ちのめしたため、

竜は毒を鼻から噴き出すことができず、その頭は地面に沈んだ。彼は竜を殴りに殴り、ついに竜は息絶えた。それから彼は斧をつかみ、それでもって竜の頭を切り落とした。その後で彼は腰を下ろした。彼はすっかり疲れてしまっていたのである。その間にその日も遅くなっていた。彼は自分が夕方までに家に帰れないことに気づき、どこから食べ物を調達してくればいいのか分からなかったが、竜を夕食に料理するのが一番よい考えだと彼には思われた。それで彼は鍋を取り出し、そこに水を満たして、火の上にかけた。それから彼は斧で大きめに肉を切り、鍋をいっぱいにした。彼は料理がとても待ち遠しかった。もう十分煮えただろうかと思って、彼は鍋の中に手を突っ込んだ。鍋の中は煮え立ち、ぶつぶつ泡立っていた。そのため彼は火傷して、指を冷やすために口の中に突っ込んだ。ところが肉汁が舌に触れ、喉を通るや否や、彼は二羽の小鳥が枝に止まって互いにさえぎっているのを耳にし、そのうちの一羽が言っていることを理解した。「私たちが知っていることを、この男の人も知っていたらいいのに。そうすれば彼はこれから家に帰って、養父ミーメを殺すでしょう。だってミーメは、自分の考えたとおりに事が運んでいたら、彼を殺すつもりだったんだから。この竜はミーメの弟だったのです。もし彼がミーメを殺さなければ、ミーメの方が自分の弟の仇を討って、彼を殺すことでしょう。」そこでジグルトは竜の血を手に取り、身体と両手に塗りつけると、血がついたところはどこも角質のようになった。それから彼は衣服を脱ぎ、自分の手が届く限り、すっかり身体中に血を塗った。しかし両肩の間には彼は手が届かなかった。それから彼は再び服を着て、帰路につき、竜の頭を手を持って帰った。

17. ミーメの死

エッキハルトは外にいて、ジグルトが戻って来るのを見た。彼は親方のところに走って行って、言った。「今ジグルトが帰って来ます。そして手には竜の頭を持っています。彼は竜を退治したのでしょう。今や残された道はただ一つです。逃げられる人は逃げて下さい。というのも、我々も十二人いますが、たとえその倍ほどの人数であったとしても、彼は我々を全員地獄に送り込むほど、今怒っているのですから。」そこで彼らは皆森の中に走り去り、身を隠した。ミーメ一人だけは彼を出迎え、お帰りと言った。ジグルトは答えた。「何がお帰りだ。犬みたいにこの頭をかみ切るがいい。」ミーメは言った。「そんなことを言うものではない。わしが何かお前の気に入らぬことをしたのなら、わしは償い

たいと思つとる。わしはお前に兜と鎧と楯を贈ろう。これらの武具はわしがホルムガルト¹⁷⁾のヘルトニートのために鍛えたものだ。驚くべき業物だぞ。さらにわしはお前に雄馬をやろう。名前はグラーネといって、ブリュンヒルドの厩舎(うまや)にいる馬だ。そしてグラムという剣をやろう。ありとあらゆる剣の中で最も優れたものだ。」ジグルトは答えた。「お前が約束したことを守るなら、承知することにしよう。」

そこでミーメは彼に鎖帷子(かたびら)を差し出した。彼はそれで武装をした。それから彼は鎧を受け取ったが、それは銀のように輝き、鋼のように堅いものであった。それも彼は身につけた。それからミーメは彼に兜を与えた。それを彼は頭に被った。それからミーメは彼に楯を手渡した。これらすべての武具はたいへん優れていて、同じくらいよい品はほとんど見つけれないほどであった。最後に彼は剣グラムを受け取った。それを手に取った時、彼はそれを振ってみた。それは彼には実にすばらしい剣だと思われた。彼は剣を力の限りに打ち振って、ミーメに死の一撃を与えた。

18. ジグルト、ブリュンヒルトから自らの素性を聞き知り、 グラーネを受け取る

ジグルトは立ち去り、ブリュンヒルトの城への道だと教えられた道を進んで行った。彼は城門が大きな鉄の扉によって閉ざされているのを見つけたが、そこには彼のために扉を開けてくれる人は誰もいなかった。そこで彼は足で激しく扉を蹴りつけると、扉に門(かんぬき)をかけていた鉄の棒が粉々になった。それから彼は城の中に入って行った。すると彼に向かって七人の門衛が走って来た。彼らはジグルトが扉を壊したことをけしからぬことと思ひ、そのため彼を打ち殺そうとした。ジグルトは剣を抜き、この家臣たちを皆殺しにしてしまふまで止めなかった。騎士たちがそれに気づき、急いで武器を取りに行つて、ジグルトに襲いかかった。しかし彼は勇敢に男らしく抵抗した。この出来事を婦人部屋にいたブリュンヒルトが聞き知り、そして言った。「ジグムントの息子ジグルトがやって来たのでしょう。たとえ彼が七人の騎士と七人の従僕を打ち殺したとしても、彼はやはり私に歓迎されるべきでしょう。」それから彼女は部屋を出て、彼らが闘っているところへ行き、止めるように命じた。それから彼

17) ロシアの一部地域を指す。山崎陽子訳(1999年)70頁参照。

女は尋ねた。「ここにやって来た男の方はどなたですか？」彼は名乗って、ジグルトだと言った。彼女は彼の家柄を尋ねた。彼は答えることができないと言った。そこでブリュンヒルトが答えた。「あなたが私にそれを答えられないなら、私があるあなたに教えましょう。あなたはジグルト、ジグムント王とジジベの息子です。ようこそ私の元へ！あなたはどこに向かって旅をしているのですか？」ジグルトは答えた。「私はここで為し遂げなければならないことがあるのです。というのは、養父ミーメが私にここでグラネ¹⁸⁾という名の雄馬を求めるように言ったのです。その馬をあなたは所有しています。もしあなたがそれを私に下さるつもりなら、私はそれを手に入れたいのです。」ブリュンヒルトは答えた。「ご希望とあらば、あなたに私の馬を一頭差し上げましょう。それにお望みなら、手厚いもてなしもあなたの思うままです。」彼女は従僕たちを送って、その馬を捕らえさせようとした。彼らはまる一日費やしてそれを捕まえようとしたが、うまくいかなかった。成果を上げられぬまま彼らは夕方戻って来た。ジグルトはすばらしい歓待を受けて一晩過ごした。朝になって、彼女は彼に十二人の家来たちを自由に使わせてくれて、彼自身は十三番目に試みることとなった。十二人の家来たちは表に出て、長い時間例の馬に手を焼いたが、それを手なずけることはできなかった。最後にジグルトが馬銜(はみ)を要求して馬に近づいた。すると馬はジグルトに向かって走って来た。彼はそれを捕まえて、馬勒(ばろく)を口につけ、その背にまたがった。それから彼はブリュンヒルトにもてなしの礼を述べて旅立った。彼は前の晩に宿を取ったところでは二晩と眠ることはなく、ついにベルタンゲン国¹⁹⁾に着いた。そこはイーズングという名の王が治めていた。彼は十一人の息子を持つ力強い勇士だった。彼は好意的にジグルトを迎え入れ、彼を自分の相談役兼旗手に取り立て、彼を長い間そばに置いていた。

Ⅲ. 『ティードレクス・サガ』における二組の結婚

1. ジグルト²⁰⁾の結婚式

ティードレク王と、なおも彼のもとに仕えていた勇士たちは、グンナル王と

18) 古ノルト語ではグラニ(Grani)であるとの原注がついている。

19) ブリターニュを指す。山崎陽子訳(1999年)70頁参照。

20) F.エリヒセンの現代語訳ではグンナルとなっているが、ここではジグルトとした方がよいと思われる。

ともにニフルンゲン国に赴いた。そこではのちにたいへん有名になった結婚式が執り行われた。つまり、若きジグルトがグンナル王とヘグニの妹であるグリーンムヒルトを妻とし、彼女とともにグンナルの領土の半分をもらうことになったのである。そこでは盛大な祝宴が催され、国中の最も高貴で気高い家柄の人々がそこに招待された。宴は五日間続き、すべての点で非常に華やかだった。ティードレク王、グンナル王、そして若きジグルトが皆一緒に席に着いていた時に、若きジグルトが義兄グンナル王に言った。「私はある女性を知っています。その人は世界中の他のすべての女性よりも美しさとあらゆる宮廷的な素養がはるかに優れていますが、しかし、最も優れているのは彼女の知恵と予知能力、有能さ、そして名誉を求める気質によってです。彼女の名はブリュンヒルトといい、ゼーガルト²¹⁾という町を治めています。この女性をあなたは奥方に迎えるといいでしょう。私はあなたにその際お力添えできます。というのも、私はそこに至るまでの道をすっかり知っているからです。」グンナル王は答えて、この提案を受け入れることにしようと言った。

2. グンナルの求婚使者としてのジグルト

それからティードレク王、グンナル王、ヘグニ、そして若きジグルトと彼らのすべての同伴者たちは、祝宴を抜け出し、遠い道のりを馬で進み、ブリュンヒルトの城に着くまで止まらなかった。彼らがそこに到着した時、ブリュンヒルトはティードレク王とグンナル王を丁重に出迎えたが、若きジグルトに対してはひどく冷たい態度を示した。というのは、彼女は今や彼に妻がいることを知っていたからである。彼らが最初に出会った時、彼は彼女に対して、彼女以外の誰も妻にはしないと誓いを立てており、そしてまた彼女も彼に対して同様に、彼以外の男とは結婚しないと誓っていたのである²²⁾。

ジグルトはブリュンヒルトと交渉し、彼女に願い事のすべてを述べ、彼女にグンナル王と一緒に来てくれるよう頼んだ。彼女は次のように答えた。「私たちは互いに誓い合ったのに、その誓いをあなたは破ったということが本当だと分かりました。たとえ世界中のすべての男たちの中から選ばなくてはならないとしても、私が自分の夫に選んだのはあなた一人です。」若きジグルトは答えた。

21) 「海の国」の意味(山崎陽子訳 2000 年参照)であり、北方の島の町と考えられよう。

22) ところが、二人が初めて出会った際、婚約を誓い合ったという記述は見られない。明らかに矛盾する記述である。編者が書き忘れたのであろうか。

「前もって決められていたことは守られるべきでしょう。しかしあなたは私が知るすべての女性の中で最も高貴で優れた人であるとはいえ、私たちはかつて予定していたように結婚することはできませんので、私はグンナル王に結婚を勧めたのです。というのは、彼はあっぱれな勇士であり、名誉ある騎士であり、力強い王なのですから。あなた方、つまり、あなたと彼とはとてもお似合いだと私には思われます。そして私はあなたよりも彼の妹の方を妻にしたかったのです。なぜなら、あなたには兄弟がいませんでしたから。そこで彼と私は、彼が私の兄、私が彼の弟になるという誓いを互いに立てたのです。」ブリュンヒルトは答えた。「私はあなたを自分のものにできないということがよく分かりました。けれども私はあなたとともにティードレク王からもこの件について誠実な助言を聞きたいと思います。」そこでティードレク王とグンナル王もこの協議に加わり、彼らは相談を続け、ついにグンナル王がブリュンヒルトを妻に迎えることを取り決めたのである。

3. グンナルの初夜

今や盛大な祝宴の支度がなされた。すべての準備が整い、多くの高貴な人々が集まると、グンナル王はブリュンヒルトと結婚式を挙げ、最初の晩に彼はブリュンヒルトのベッドで眠ることになった。第三者は館の中で眠ってはならないとされた。守衛たちは外で見張りをしなければならなかった。今や二人きりになると、王は花嫁のもとに横たわろうとしたが、彼女はこれを頑なに許そうとしなかった。彼らは互いに格闘し、その結果彼女は彼と自分の帯を取り、それをもって彼の両手両足を縛ってしまった。それから彼女は彼を釘に引っかけた。そしてそこで彼はほとんど朝になるまで吊るされていた。夜明けに彼女は彼を解き放した。彼は自分のベッドに入り、そこに横になっていた。すると彼の家来たちが彼を呼びに来て、彼が起き出して彼らと一緒に朝の飲み物を飲みに行くこととなった。その夜のことは彼もブリュンヒルトも誰にも話さなかった。

4. グンナル、ジグルトに助力を乞う

二晩目と三晩目も同様の結果に終わった。そのためグンナル王はひどく不機嫌になり、どうしたらいいのか分からなかった。その時彼の頭には、義弟ジグルトが彼に対していかなる場合にも兄弟であると誓ったという考えがよぎった。

ジグルトこそはあらゆる男のうちでも最も賢かったので、グンナル王は彼にこの件を打ち明けて知ってもらい、どうすればいいか彼から助言してもらえらるうと考へた。彼はジグルトに内密に相談することを求め、彼に事の真相を打ち明けた。ジグルトは答へた。「どうしてこういうことになったのか教えましよう。彼女は処女を守っている限りは、腕力で彼女にまさるような男をほとんど見つけることができないという性質なのです。しかし彼女からそれが奪われてしまえば、彼女は他の女よりも強いということはありません。」グンナルは答へた。「このことはどうしても秘密にしておかなければならないことだったが、君ほどしかと信頼できる者はいないので、我々の友情と義兄弟の絆のために、私は打ち明けたのだ。そもそも世界にそれができる者がいるとすれば、君こそ彼女の処女を奪うだけの強さを持っていることを私は知っている。そしてそうなった暁にもそれが人の耳に入ることがないと、最も信頼を寄せられるのは君なのだ。」ジグルトは答へて、王のお望みを成し遂げましようかと約束した。こうして相談は締め括られた。

5. ジグルト、ブリュンヒルトを屈服させる

晩になりグンナルが床に就くことになると、彼は若きジグルトが王の寢床に寝られるように手はずを整へた。しかし彼自身はジグルトの服を着て外に出ていたが、誰もがグンナルを若きジグルトだと信じていた。皆が寝入ったり、立ち去ったりするまで、ジグルトは毛布を頭の上に引っ張り上げて、ひどく疲れているふりをした。それから彼はブリュンヒルトを襲い、ただちに彼女の処女を奪ってしまった。朝になって、彼は彼女の手から黄金の指環を抜き取り、別のものを代わりにはめさせておいた。それから百人の男たちが彼のもとにやって来た。最初の男はグンナル王だった。彼はベッドに行き、ジグルトは彼を出迎へた。彼らは首尾よく服装をすっかり元通りに取り替へた。何が起こったのか知る者はいなかった。

6. 結婚式の終了

祝宴は今や七日七晩続いていた。そこで客人たちは出発の準備をした。グンナル王はブリュンヒルトの町に公爵を任命して治めさせた。彼自身は奥方のブリュンヒルトとともに馬に乗ってニフルンゲン国に帰った。帰国すると、彼は義弟の若きジグルトと、兄弟ヘグニとゲールノーツとともに自分の国に暮らし、

平和に国を管理し治めた。一方、ティードレク王は自分の家来たちを全員連れて故郷ベルンへ²³⁾と向かうこととなり、彼らは最良の友として別れて行った。

IV. 『ティードレクス・サガ』におけるジグルトの暗殺

1. ニフルンゲン族と若きジグルト

この時代、ニフルンゲン国のヴェルニツァ²⁴⁾という町でグンナル王は弟ヘグニとそれに次ぐ地位の義弟とともに国を治めていたが、この義弟というのは南と北の国々のあらゆる勇士や偉大な領主たちの中でも最も名高い男だった。それは彼の強さ、多方面における器用さ、明るく自信たっぷりな気質、聡明さ、そして予知能力によるものであった。彼こそ若きジグルトであり、彼はアルドリアン王の娘で、ヘグニとグンナルの妹であるグリーンヒルトを妻にしており、グンナルの方は当時力強く美しいブリュンヒルトと結婚していた。ジグルトがグリーンヒルトを娶って以来、ニフルンゲン国はまったくのところこの世の栄華を極めていた。それは第一に、そこに君臨していた多くの領主たちが権力と戦闘力においては彼らには及ばなかったためである。彼らの敵は皆、彼らに恐れをなした。第二に、彼らは金や銀といった見事な財産をすべての他の王たちよりも多く所有していたためである。彼らは敵に対してはきわめて残酷であったが、仲間の間ではあたかも彼ら全員が兄弟でもあるかのようによき友であった。若きジグルトはあらゆる点で彼らから抜きんでていた。彼の皮膚は猪の皮か角のように堅かった。どんな武器もそこには歯が立たなかったが、両肩の間だけは例外で、そこでは彼の皮膚は他の人間たちのものと同じだった。

2. 王妃たちの口論

ある日、王妃ブリュンヒルトは広間に入って来た。グンナル王の妹グリーンヒルトがすでにその中に座っていた。ブリュンヒルトは彼女の席に着くと、グリーンヒルトに言った。「なぜあなたはそのように高慢に、あなたの女王である私の前だというのに起立しないのですか？」グリーンヒルトは答えた。「私があなただの前で起立しないのがどういうわけか、教えて差し上げましょう。第一に、あなたの座る上座はかつて私の母のものだったからです。あなたよりも私がそこに座るのがふさわしいのです。」そこでブリュンヒルトは言った。「たとえこ

23) イタリアのペローナを指す。

24) ライン河畔のヴォルムスを指す。

の席があなたの母上のもので、この町とこの国があなたの父上のものであったにせよ、今はそれを私が所有しているのであり、あなたではありません。あなたは夫ジグルトの後について森の中に走って行き、雌鹿の小道を探し回る方がよろしいでしょう。その方がニフルンゲン国の女王であるよりもあなたにはお似合いです。」グリームヒルトは言った。「なぜあなたは私をそんなふうに罵り、非難して侮辱するのですか？私の意見では、若きジグルトが私の夫であるということは、誉れ高く名誉あることだと思われますのに。あなたがこの口論を煽り始めたのですよ。あなたにとって何が名誉で、恥になるのか、私たちがそれについてもっと語ることをあなたは望んでいるのですからね。あなたに最初の質問をしますから答えて下さい。誰があなたの処女を奪ったのですか、そしてあなたの最初の夫は誰ですか？」ブリュンヒルトは答えた。「はっきりと答えられることを尋ねるものですね。それには私にとって何ら恥となることはありません。力強いグナル王が多くの選り抜きの領主たちを伴って私の城にやってきました。そして私は味方たちの助言で彼を夫としました。私はいろいろと華やかに彼と結婚式を挙げ、多くの客人を招いて、すばらしい祝宴が催されました。それから私は彼とともにこのニフルンゲン国にやってきました。私はあなたにも、尋ねる他のどんな人にも隠すつもりはありません。グナルが私の最初の夫です。」グリームヒルトが答えた。「今あなたは嘘をつきましたよ。私の期待していたとおりです。最初にあなたの処女を奪った男は若きジグルトなのです。」ブリュンヒルトは答えた。「私は一度もジグルトの情婦になったことはないし、彼は決して私の夫ではありません。」グリームヒルトは答えた。「証拠にこの黄金の指環をお見せしましょう。これは彼があなたの指から抜き取ったものです。彼があなたの処女を奪った後にね。この黄金を彼はあなたの手から外して、私に贈ってくれたのです。」ブリュンヒルトは指環を見て、それが自分のものだということを認め、どうしてこのようなことになったのかを、今やはっきり悟った。彼女はこのように大勢の他人が居合わせる中でこのことについて論争してしまったことをひどく悔やんだ。以前はほんの数人しか知らなかったこのことが、今や世界中の人の知るところとなったのである。それがブリュンヒルトの気分をひどく害し、そのため彼女は顔を真っ赤にしたが、それはまるで新しい傷からしたたり落ちる血のようだった。彼女は黙って、一言も話さず、立ち上がって、退出し、町の外へと出て行ってしまった。

3. ブリュンヒルト、復讐を要求する

ブリュンヒルトは三人の男たちが馬に乗って町へやって来るのを見た。それはグンナルとヘグニとゲールノーツだった。彼女は彼らを出迎えに行き、激しく嘆いて涙を流し、自分の服を引き裂いた。三人は一日中狩りのために森に出かけていたのである。彼らは王妃ブリュンヒルトが振る舞う様子を目にして、何が彼女をそのように深く悲しませるのが分からず、馬を止めた。すると王妃は言った。「力強きグンナル王よ、私は我が身をあなたの力に委ね、私の国と友らと一族をあとに残して来ました。そうしたのとはすべてあなたのためでした。あなたか、それとも他の誰かが、私の恥辱の仇を討ってくれませんか？あなたが私のために復讐するつもりがなくても、あなたはご自分のために復讐しなければなりません。若きジグルトはあなた方との間の誠実な誓いを破り、彼の妻グリームヒルトにすべてを語ってしまったのです。つまり、あなたが彼を信用して、あなた自らが私を屈服させたのではなく、若きジグルトに私の処女を奪わせたのだということ。そのことをグリームヒルトは私に向かって今日すべての人々の前で明らかにしたのです。」そこでヘグニが答えた。「権力ある王妃ブリュンヒルトよ、もう泣かないで下さい。そのことについてはもう何も仰しやらず、何事もなかったかのように振る舞って下さい。」ブリュンヒルトは答えた。「私もそうしたいものです」と彼女は言った。「若きジグルトはここあなた方のもとに旅人のようにやって来ました。ところが、今では彼はたいそう高慢で、力をつけ、今すぐにでもあなた方は皆彼に仕えることになりそうなほどではありませんか。最初に私のところに来た時には、彼は自分の父も母も素性も知らなかったものを。」グンナル王は言った。「妻よ、泣かないでおくれ！若きジグルトはもはや我々の君主になることはないし、我が妹グリームヒルトがそなたの女王になることもないから。」するとブリュンヒルトは、王が願ったとおり、泣き止んだ。グンナル王と弟ヘグニは馬を進めて町の中に入り、広間へやって来た。家来たちが彼らを出迎えた。グンナル王とヘグニとゲールノーツは、何も聞かなかったかのように振る舞い、ブリュンヒルトも同じようにした。若きジグルトは森へ出かけて獣を追いかけ、家来たちと一緒に楽しんでた。彼はこの時にはまだ帰って来ていなかった。

4. ヘグニ、復讐の準備をする

それから数日後の夕方、若きジグルトが彼の家来たちとともに戻って来た。

彼がグナル王のいる広間に足を踏み入れると、王は立ち上がって、義弟の若きジグルトに挨拶した。同じことを王の弟たちヘグニとゲールノーツ、そして広間にいた全員がした。彼らはその晩酒を飲み、たいへん上機嫌だった。王妃ブリュンヒルトだけが浮かぬ様子で座っていた。

二、三日後になって、ヘグニは兄グナルに言った。「王よ、いつ我々皆と一緒に森へ狩りにお出かけになりますか？」グナル王は答えて、いつか天気のよい日があれば出かけることにしようと言った。再び二、三日が過ぎ去った。そこでヘグニは台所へ行き、こっそりと料理人に言った。「明日の朝は早めに我々の朝食を用意してくれ。どの食べ物もできるだけ強く塩を利かせてくれ。そして一番塩味を利かせたものを若きジグルトに与えるのだ。」それから彼はそこを去って、飲み物の給仕役を呼びつけて言った。「明日、我々が朝食を摂っている時、飲み物を出すのはためらっておくれ。」そうしてヘグニは戻って行った。

5. ヘグニとブリュンヒルトの密談

翌朝、日が昇ってまもなくグナルとヘグニは、獣狩りをするために森へ出かけようとした。彼らは食卓につき、朝食を摂った。若きジグルトもその広間にやって来て尋ねた。「王よ、どこへお出かけですか？なぜこんなに朝早く朝食を摂っておいでですか？」王は答えた。「我々は獣の狩りをして楽しむために出かけようと思う。君は我々と一緒に行くか、それとも屋敷に残るかね？」若きジグルトは答えた。「王よ、あなたがお出かけとあれば、私はもちろん当然お供いたします。」そこでグナル王は言った。「食卓について食べなさい！」彼もまたそうした。料理人と飲み物の給仕役は、すべてヘグニが命じていたとおりにした。朝食後、馬には鞍が置かれ、彼らは馬に乗って森へと出かけて行き、獣を追いかけ、犬を放った。ジグルトが町から出て行くとすぐに、グリームヒルトは眠るためにベッドに入って横になった。なぜなら、彼女はたいへんブリュンヒルトに腹を立てていたのだから、彼女のそばに座っていたくなかったし、彼女と話をしたくもなかったからである。ヘグニは他の者たちより少し遅れて町から出て行き、長い時間王妃ブリュンヒルトと語らっていた。彼らは内密に相談し、ブリュンヒルトはヘグニに、若きジグルトが晩には戻らず、昼間のうちに死んでしまうよう、うまくやってくれるように頼んだ。その報酬として彼女は彼に金、銀、その他の高価な宝や、彼が望むものは何でも与えようと言った。しかし彼は、若きジグルトはたいへん力強い勇士なので、自分がジグルト

を殺せるかどうか、しかと約束することはできないと言ったが、しかし、自分のできる限りのことはしようと誓った。それから彼もまた森へと馬を駆って行った。王妃は彼が約束を果たしてくれるようにと、心から彼の幸運を願った。

6. 若きジグルトの死

彼らは今やくたくたになるまで獣を追って駆け回った。時々彼らは自分たちの足でも走った。ジグルトはいつものように先頭であった。ついに彼らは長い時間追いかけていた一頭の大きな猪をしとめた。犬たちがしっかりとかみついた時に、ヘグニはそれを槍で突き刺して息の根を止めた。全員がその周りを囲み、猪の肉を切り刻み、内臓を取り出して、それを犬たちに投げ与えてやった。今や彼らは全員身体がたいへん熱くなり、たいそう疲れて、自分たちの身体がばらばらになりそうだと思うほどだった。それから彼らは小川のほとりに来て、グナル王が屈んで、水を飲み、弟ヘグニは別の側で同じようにした。そこに若きジグルトもやって来て、他の者たちと同じように身を屈めて飲んだ。そこでヘグニは跳ね起き、ジグルトが水を飲んでいて、槍を両手でつかみ、ジグルトの肩甲骨の間に突き刺したので、槍はジグルトの心臓を貫き、胸から突き出てきた。刺された時、ジグルトは言った。「今お前がしたような仕打ちを義兄弟から受けるとは思いませんでした。まだまっすぐ両足で立っていた時に、私がこのことを知っていたならば、お前が私に致命傷を与えるというこのような行為は実行させなかったものを。そうすればその前に私の楯は壊れ、兜は打ち砕かれ、剣は刃こぼれするほどに私は闘い、このようになる前に、お前ら四人全員は死んで横たわっていたものを。」その後若きジグルトは死んだ。ヘグニはしかし言った。「この午前中ずっと我々は一頭の猪を追いかけて、四人がかりでもなかなか捕まえることができないかと思われたが、しかし今や短時間で私は一人で一頭の熊、あるいは水牛を仕留めたぞ。もし彼が防御していたなら、我々四人がかりでも、若きジグルトを打ち負かすことは、一頭の熊か水牛か、つまりあらゆる動物の中で一番獰猛なやつを仕留めるよりも、もっと骨の折れることになっただろう。」そこでグナル王は言った。「まことにお前は見事に狩りをしたものだ。我々は、妹グリームヒルトがどこにいようとも、この水牛を彼女のところへ運ぶことにしよう。」そこで彼らはジグルトの亡骸を担ぎ上げて、町へと帰って行った。

7. グリームヒルト、若きジグルトを悼む

王妃ブリュンヒルトは胸壁の上に立ち、グンナルとその弟たちヘグニとゲールノーツが城に向かって馬を走らせているのを目にし、また彼らが首尾よく若きジグルトを暗殺して連れて来たのを見た。彼女は彼らを出迎えに行き、彼らに見事な狩りの祝いの言葉を述べ、彼らに亡骸をグリームヒルトのところに運ぶよう命じた。「彼女はベッドで眠っています。あの女は死者を抱きしめるがいい！今や彼の身には受けて当然の報いが与えられたのだ。否、彼とグリームヒルトの身にと言うべきか。」彼らは亡骸を部屋に運び上げた。部屋には鍵がかかっていた。そこで彼らは扉をこじ開け、亡骸を中に運び込み、ベッドの中、つまりグリームヒルトの腕の中に投げ入れた。そのため彼女は目を覚まし、若きジグルトが彼女のそばでベッドに死んで横たわっているのを目にした。彼女は若きジグルトに語りかけた。「ひどい傷のように思われる。どこであなたはこのような傷を受けたのですか？ここにあるあなたの黄金の飾りの付いた楯は無傷で、打ち砕かれてもいない。それにあなたの兜はどこも壊れていない。何によってあなたはそんなに傷ついたのですか？あなたは暗殺されたに違いない！誰がそれをしでかしたのかが分れば、その者には報復をしてやろう。」ヘグニは答えた。「彼は暗殺されたのではない。我々は粗野な猪を追いかけているうちに、その猪が彼に致命傷を与えたのだ。」グリームヒルトが答えた。「その猪とはあなただったのでしょ、ヘグニ。さもなければ誰だというのです。」そう言って彼女は激しく涙した。彼らは部屋から出て、広間に入って行き、気分は上々だった。ブリュンヒルトも以前より悲しむことはなかった。

一方、グリームヒルトは彼女の家来たちを呼び、若きジグルトの亡骸を運ばせて、丁重に埋葬させた。このジグルトが暗殺されたという出来事が知れ渡ると、誰もが、力と勇気と、あらゆる種類の優雅さ、勇敢さ、気前のよさを備え、それらのためにあらゆる他の人間より優れているような、あのような男は二度とこの世に現れることはないだろう、と言った。彼の名前はドイツ語を話す人々の間でも、北方の人々の間でも忘れられることはないであろう。

V. 『ティードレクス・サガ』におけるジグルト像の特質

以上のように『ティードレクス・サガ』における英雄ジグルトの物語部分を三つに分けて邦訳により紹介してくると、第二次伝承における英雄ジグルトの伝説は第一次伝承のそれとはかなり異なっていることが明らかである。以下、

特に第一次伝承の『ヴォルスンガ・サガ』との比較において『ティードレクス・サガ』におけるジグルト像の特質をまとめることにしよう²⁵⁾。

1. 若きジグルトの冒険

まず最初に英雄ジグルトの両親に関する物語が展開されているが、ここではジグルトの父ジグムントはタルルンゲン国の王として登場し、ヒスパニアのニードゥング王の娘ジジベに求婚する。このエピソードは従来のニーベルンゲン伝説には見出されない、『ティードレクス・サガ』に特有のものであり、ジグムント王はここでは『ヴォルスンガ・サガ』のシグムンド王のように北欧の主神オーディンにはまったく結びつけられていない。それに伴ってジグムント王はオーディンの意志によって戦死することもない。義弟ドラールゾルフ王を援軍するために出かけたポーレン国での戦いでも勝利を収めて凱旋し、その後も彼はタルルンゲン国を支配し続けるのである。従って、『ヴォルスンガ・サガ』全体を貫いている伝統的なモチーフとも言うべき「父の仇討ち」も展開されていない。ここにおいて死ぬことになるのは、父ジグムントではなく、逆に母ジジベの方である。すなわち、ジジベは二人の伯爵に騙されて出かけて行ったシュヴァーベン²⁶⁾の森の中で一人の息子を生み落とし、子供を入れたガラス容器が川の中に落ちたのを見て、気絶して死んでしまうのである。

このジグムント王と王妃ジジベの間に生まれた子供の物語についても、『ヴォルスンガ・サガ』には見出されないまったく別の伝承が語られている。すなわち、ガラス容器に入れられたまま川を流れて下って、海岸に流れ着いた子供は、雌鹿に救われて、鹿の子供たちと一緒に育てられた後、鍛冶屋ミーメに拾われて、ジグルトと名付けられて十二歳になるまで、彼のもとで養育されるのである。孤児として荒野の中で妖精の鍛冶屋のもとで成長するというエピソードは、五、六世紀にライン河畔フランケンで生まれたニーベルンゲン伝説の原型においてすでに語られていたものと推定される²⁶⁾が、しかしそれがタルルンゲン国のジグムント王とヒスパニアのニードゥング王の娘ジジベの物語に結びつけら

25) 『ヴォルスンガ・サガ』における登場人物のカタカナ表記については、菅原邦城訳(東海大学出版会)に従い、『ティードレクス・サガ』のそれと敢えて統一することはしないことを付記しておく。

26) 石川栄作:『ニーベルンゲンの歌』—構成と内容—(郁文堂)60頁および石川栄作:『ニーベルンゲンの歌』を読む(講談社学術文庫)31頁参照。

れているのは、まったく新しい伝承であり、この作品独自の貴重なエピソードと言ってよいであろう。

鍛冶屋ミーメを養い親としてジグルトが教養を積みながら成長し、名馬グラエネを手に入れるエピソードにしても、この作品では『ヴォルスンガ・サガ』とは異なった展開となっている。『ヴォルスンガ・サガ』ではその鍛冶屋の名前はレギンといい、このレギンの勧めに従ってシグルズはヒャールプレク王の許可を得てから馬選びに出かけると、長い髭の老人（オーディン）に出会い、その老人の知恵で名馬グラエネを手に入れるのであるが、『ティードレクス・サガ』では、あとで再度述べるように、その名馬グラエネはブリュンヒルトの厩舎（うまや）にいるものとされ、竜退治のあとで鍛冶屋ミーメからそれを教えてもらい、後日ブリュンヒルトから貰い受けることになっている。

名馬グラエネとともに重要な役割を果たす名剣グラムを鍛え上げるエピソードに関して、『ヴォルスンガ・サガ』では鍛冶屋レギンがシグルズの力を借りて、竜ファーヴニルから黄金を奪い取るためにそれを鍛え上げようとするのであり、レギンはシグルズの父シグムンドの折れた剣でもってようやく名剣グラムを鍛え上げることに成功するのである。これに対して『ティードレクス・サガ』ではそのようなことはまったく語られずに、名剣グラムは竜退治のあと兜や鎧や楯とともに鍛冶屋ミーメから貰うことになっている。

従って、そのあとに展開される竜退治に関して、当然のことながら両作品は互いに異なる展開となる。すなわち、『ヴォルスンガ・サガ』ではシグルズが悪竜（ファーヴニル）を退治するために森へ出かけて行ったのは、財宝獲得を目論む養父レギンによって唆されたことによるが、『ティードレクス・サガ』ではミーメが乱暴なジグルトを厄介払いするために、竜レギンに殺してもらおうと企んだことによるのである。そのため『ティードレクス・サガ』ではジグルトが鍛冶屋でミーメの徒弟たちにいたずらをするさまが詳しく展開されている。ドイツでその後に生成発展したエピソードがこの作品の中にも伝承されたものと推定される。竜を退治する場面にしても、『ヴォルスンガ・サガ』では長い髭の老人（オーディン）の教えに従って、溝の中に身を潜めて、竜がその上に這って来たときに、下から名剣グラムを突き刺して退治するのに対して、『ティードレクス・サガ』では火の中で赤々と燃えていた最も大きな木の幹を取り上げて、それでもって竜を殴り殺すことになっている。

退治したその竜を料理した際に鳥の声が理解できるようになるエピソードに

関しては、料理するものが竜の心臓（『ヴォルスンガ・サガ』）か、または竜の肉（『ティードレクス・サガ』）という違いはあるものの、前者では竜の血が、また後者では肉汁が舌に触れて小鳥の言葉が分かるようになることは共通している。その小鳥の言葉から養父が裏切る魂胆でいることを聞き知るのも共通しているが、しかし、前者では鳥の声に従ってその場でただちに名剣グラムで養父を殺害したあと、さらに鳥の勧めるとおり竜の洞穴で莫大な財宝を見つけてその所有者となるのに対して、後者では自らが竜の血を身体中に塗りつけて角質の身体となったのち、鍛冶屋のもとに帰ってからミーメを殺害することになっている。この小鳥の言葉を理解するエピソードは、ドイツからの伝承ではなく、北欧において初めて生成発展したものと推定されるが、第一次伝承と比較して第二次伝承ではこの小鳥の言葉が果たす役割がだんだんと小さくなっていることが理解できよう。

従って、そのあと英雄がブリュンヒルトのもとへ出かけることになるエピソードに関しても、『ヴォルスンガ・サガ』では鳥の言葉に従ってヒンダルフィアルの山で眠るブリュンヒルトのもとへ出かけて行くのに対して、『ティードレクス・サガ』では養父ミーメからブリュンヒルトの厩舎(うまや)には名馬グラナーネがいることを教わったからであるとされている。しかも前者ではシグルズはブリュンヒルトからさまざまな教えを聞いたあと、彼女と婚約を誓い合い、それからブリュンヒルトの養い父ヘイミルのもとでも再会して二度にもわたって婚約を取り交わすことになっているのに対して、後者ではジグルトはブリュンヒルトから自らの素性を教えてもらったあと、雄馬グラナーネを獲得するエピソードが語られているだけで、婚約については何の記述も見られない。二人の間に取り交わされる婚約のエピソードは、ドイツからの伝承というよりはむしろ北欧において初めて生成発展していったものと推定され、この点に関しても第二次伝承は北歐的要素が次第に弱くなっていて、逆にドイツ的要素が強まっていることが理解できよう。

2. 二組の結婚

このように概して第一次伝承は北歐的要素が強くなっているのに対して、第二次伝承はドイツ的要素が強くなっているが、このことは続いて語られる二組の結婚においても明らかである。

まず『ヴォルスンガ・サガ』ではシグルズとブリュンヒルトの婚約が二度に

わたって語られているので、シグルズはその後キューキ王の城にやって来たとき、その王妃グリームヒルドから忘れ薬を飲まされて、ブリュンヒルドのことを忘れることになっている。ここではこの王妃がとりわけ重要な役割を演じており、シグルズがその娘グズルーンと結婚するのも、また息子グンナルがブリュンヒルドに求婚することになるのも、さらにはそのグンナルの求婚の旅にシグルズが同行することになるのもすべて、この王妃の策略によるものである。すなわち、グンナルは母グリームヒルドの指示に従ってシグルズを伴い、ブリュンヒルドのもとに出かけると、その周りには火が燃えていたが、その場面でもシグルズとグンナルは王妃グリームヒルドの教えに従って姿を交換し、シグルズはグンナルの姿で名剣グラムを携えて、名馬グラニに乗って火炎の中へ飛び込んで、ブリュンヒルドの前に立つのである。シグルズはキューキの子グンナルだと名乗り、そこでブリュンヒルドは誓い通り、彼を歓迎する。そこに彼は三夜とどまり、彼女と寝床を共にするが、名剣グラムを抜き身のまま二人の間に置いた。さらに彼は、以前に彼女に与えていた腕環（アンドヴァリの贈物）を抜き取って、ファーヴニルの遺産の中から別の指環を与えた。このあと彼は同じ火を乗り越えて、供のもとに戻って、グンナルと再び姿を交換して、こうしてブリュンヒルドはグンナル王の妻となったのである。これらの展開は北歐において初めて生成発展したもので、すべてが王妃グリームヒルドの策略によるものであることが明らかである。

これに対して『ティードレクス・サガ』ではこの王妃グリームヒルドにあたる人物は登場せずに、ジグルトはベルタンゲン国滞在を経て、ニフルンゲン国へ赴いてからグンナル王とヘグニの妹であるグリームヒルトを妻として、彼女とともに領土の半分をもらうことがごく簡単に述べられているだけである。しかもこの作品ではジグルトが義兄グンナルにゼーガルトという町に住むブリュンヒルトを奥方に迎えるよう勧めるのである。ところが、ジグルトがグンナル王の伴をしてブリュンヒルトの城へやって来た場面では、ジグルトとブリュンヒルトは初めて出会った際に婚約の誓いを取り交わしたことになっている。上でも述べたように、二人はこの作品では婚約を取り交わしていないことを考慮に入れると、これは明らかに矛盾する記述である。編者が書き落としたものであろうか。ともかくもこの作品ではブリュンヒルトはジグルトと話し合いにより、最後にはティードレク王とグンナル王も協議に加わって、グンナル王の妻となることを決意している。その際、ジグルトが彼女に話したことで特に興味

深いことは、ジグルトがブリュンヒルトよりもグンナル王の妹グリームヒルトを妻にしたい理由として、「ブリュンヒルトには兄弟がいない」ことを指摘していることであり、ジグルトとグンナル王の義兄弟の契りが重要視されていることが明らかである。のちにジグルトが暗殺される理由も、この兄弟の誓いを破ったからであるとされており、兄弟の契りがこの作品では大きな重要な意味を持っているのである。

従って、『ティードレクス・サガ』ではジグルトがこの兄弟の誓いを破るエピソードが詳しく語られている。すなわち、『ヴォルスンガ・サガ』ではシグルズはブリュンヒルトとの間に抜き身の剣グラムを置くことによって義兄グンナルとの契りを忠実に守ったのに対して、『ティードレクス・サガ』では逆にジグルトはブリュンヒルトを押さえつけて、彼女から処女を奪い取ってしまうのである。しかし、この行為はグンナル王から前もって許しを得たうえでのことであるから、その行為自体では義兄グンナルとの契りを破ったことにはならない。すなわち、ブリュンヒルトは「処女である限りは強い力を有したまま」なので、ジグルトはグンナル王のためにブリュンヒルトの処女を奪い取ったのであり、グンナル王の方も「二人の友情と義兄弟の絆のために」自らの恥辱を打ち明けて、ジグルトの行為を容認したことになっている。だからジグルトが義兄弟の契りを破ることになるのは、その二人だけの秘密を妻グリームヒルトに話したことによってである。そのことによってその秘密はのちに両王妃の口論で暴露されてしまう結果となるのである。

3. ジグルトの暗殺

このように『ティードレクス・サガ』ではジグルトはグンナル王の許しを得てブリュンヒルトの処女を奪い取ったのだから、その後に展開される両王妃口論にも当然のことながら違いが生じてくる。

まず『ヴォルスンガ・サガ』では口論は水浴びをするために出かけたライン河の中で展開される。ブリュンヒルトが最初に河の中に入ったことからグズルーンと口論になり、それが夫自慢へと発展して、ついにグズルーンはシグルズから聞いていた秘密を暴露し、その証拠としてシグルズがブリュンヒルトの手から奪い取っていた腕環（アンドヴァリの贈物）を見せるのである。この恥辱をブリュンヒルトから聞いたグンナル王は、シグルズ暗殺を弟ホグニにほのめかすが、逆にホグニから「敵対行為によって誓いを破ることはふさわしくない」

と警告され、結局は誓いに加わっていない弟グットルムを唆し、そのグットルムの方も母グリームヒルトの唆しなどもあって、ついに殺人を行う約束をしてしまうのである。

これに対して『ティードレクス・サガ』では両王妃口論は、ライン河の中ではなく、広間の中で王妃の座席をめぐる始められ、それが夫自慢へと発展して、ついにグリームヒルトはジグルトから聞いていた秘密を暴露し、その証拠の品としてかつてブリュンヒルトのものであった黄金の指環を見せるのである。この恥辱を聞いたグンナル王は、義兄弟の契りを破ったジグルトの暗殺をただちにブリュンヒルトに約束し、ヘグニがのちにそれを実行することになるのである。暗殺の動機とその実行者が『ヴォルスンガ・サガ』とは異なっていることが容易に理解されよう。

このように異なった展開になると、暗殺の場所もその方法もおのずと異なってくる。『ヴォルスンガ・サガ』では暗殺の場所はベッドの中である。つまり、グットルムは翌朝、シグルズがまだベッドの中で休んでいるとき、彼のもとに入って行き、二度は怯んだものの、三度目に剣をシグルズに突き刺すのである。そのあとシグルズが自らの剣グラムを手にとって、逃げるグットルムめがけて投げつけて、仇を討ってから息絶えるのも北欧第一次伝承の特徴である。夫の血に浸されて目覚めたグズルーンは、苦しみの吐息を吐くが、一方、望みを遂げたブリュンヒルトは笑い声をあげるものの、やがてグンナに向かって、シグルズは結婚式の夜に実は花嫁の貞操を大切にすることを告白するとともに、シグルズの遺体を焼く火の中に自ら身を投じて彼の死に殉じてしまうのである。

これに対して『ティードレクス・サガ』では暗殺の場所は森の中へと変わり、しかも暗殺を実行するのは、すでに述べたように、ヘグニであり、ジグルトが泉の水を飲んでいるところを槍で突き刺すのである。これはドイツからの伝承に基づくものであり、『ニーベルンゲンの歌』の展開により近いものとなっていることが明らかである。ジグルトの遺体がグリームヒルトのもとに運ばれると、彼女はそれをヘグニの仕業だと見て取り、やがてその夫の復讐を実行していくのであり、この点でもドイツ中世英雄叙事詩の展開に近いものとなっていると言えよう。

結び

以上のように見てくると、第一次伝承の『ヴォルスンガ・サガ』は古い伝説

相を伝えていて北欧神話化されているのに対して、第二次伝承の『ティードレクス・サガ』は比較的新しい伝説相を伝えていて、低地ドイツ的性格を如実に示していることが容易に理解できよう。ジグムントの息子ジグルトもここでは北欧の主神オーディンに結びつけられることはない。ドイツでその後新たに生成発展したジグルト像が伝承されている。ジグルトがのちに出会うこととなるブリュンヒルトも、ここではオーディンによって罰された炎の中の女性、ヴァルキューレでもない。ブリュンヒルトがここに登場しているのは、グリームヒルトとの口論を展開し、ジグルト暗殺のきっかけを作るためであり、『ヴォルスンガ・サガ』においてのように、ジグルトの死後自刃することもない。『ティードレクス・サガ』の編者がブリュンヒルトにそれほど関心を示していないことが明らかである。この作品ではブリュンヒルトはジグルトの遺体が運ばれて来たとき、グンナル王たちを出迎えて、見事な狩りの祝いの言葉を述べて、遺体をグリームヒルトのもとへ運ぶよう命じただけで、その後はもはや登場しない。このブリュンヒルトに代わって逆に多大の関心を集めているのがグリームヒルトである。このグリームヒルトが重要な役割を果たしているのは、その後ドイツで新たな展開を見せた比較的新しい伝承によるものであり、『ティードレクス・サガ』はすべてにおいて『ニーベルンゲンの歌』のあらすじにより近いものとなっていることが容易に理解できよう。このことはそのあとで語られているグリームヒルトの復讐物語になるとさらに一層明白となるのであるが、そのグリームヒルトの復讐物語については、稿を改めて紹介することにしたい。

(2004・7・25)

*本稿は石川栄作（徳島大学総合科学部教授）と野内清香（東北大学大学院文学研究科博士課程2年在学中）の共同研究による成果である。本稿の中心を成す『ティードレクス・サガ』の邦訳については、まず野内が訳出して、石川がそれに加筆修正を施したものであることを付記しておく。